

## I-A181 高速多重極境界要素法による2次元動弾性問題の解析

大成建設 正会員 ○ 井上耕一  
福井大学工学部 正会員 福井卓雄

## 1 はじめに

本論文では、2次元動弾性問題の周波数領域境界要素法を Galerkin ベクトルで定式化し、従来の境界要素法では到底できなかった大規模な問題に対し精度を保ったまま高速に解析する手法を述べる。

## 2 2次元動弾性問題

一定の角周波数  $\omega$  をもつ平面定常波が、等方等質な2次元弾性体内を伝播する問題を考える。 $G$  はせん断弾性係数、 $\nu$  は Poisson 比である。領域  $B$ 、その境界  $\partial B$  において2次元動弾性の境界値問題は Galerkin ベクトル  $F$  を導入し、変位を  $u(x)$  応力を  $\sigma(x)$  物体力を  $X(x)$  として、つぎのように書ける。

$$\begin{aligned} 2Gu &= -\nabla(\nabla \cdot F) + 2(1-\nu)\square_L F, & \square_L \square_T F &= -\frac{X}{1-\nu} \quad \text{in } B \\ u(x) &= \hat{u}(x) & \text{on } \partial B_1, & & s(x) = n \cdot \sigma(x) = \hat{s}(x) & \text{on } \partial B_2 \end{aligned} \quad (1)$$

ここに、 $n$  は境界上の単位法線ベクトル、 $s$  は境界応力ベクトルである。また、波動オペレーター  $\square_L = \nabla^2 + k_L^2$ 、 $\square_T = \nabla^2 + k_T^2$  であり、 $k_L, k_T$  は弾性体を伝わる縦波、横波の波数で位相速度を  $c_L, c_T$  とすると  $k_L = \omega/c_L$ 、 $k_T = \omega/c_T$  で表される。ソース点  $y$  に作用する集中力を  $P(y)$ 、変位のくいちがい量を  $U(y)$  とする。基本特異解  $G(x; y)$  および第2基本特異解  $S(x; y)$  による変位はそれぞれ  $u_G(x) = G(x; y) \cdot P(y)$ 、 $u_S(x) = S(x; y) \cdot U(y)$  で与えられ、対応する Galerkin ベクトル  $F_G(x; y)$ 、 $F_S(x; y)$  は次のようになる。

$$\begin{aligned} F_G(x; y) &= fP, & F_S(x; y) &= G[n(\nabla f \cdot U) + (\nabla f \cdot n)U] + \lambda \nabla f(n \cdot U) \\ f(x; y) &= -\frac{2}{k_T^2} \left[ \frac{i}{4} H_0^{(1)}(k_T |x - y|) - \frac{i}{4} H_0^{(1)}(k_L |x - y|) \right] \end{aligned} \quad (2)$$

ここに、 $\lambda$  は Lamé 定数、 $H_0^{(1)}$  は第1種0次の Hankel 関数である。 $B$  を無限領域と考え、入射波を  $\hat{u}$  として、境界  $\partial B$  による散乱問題を考える。このとき波動場  $u$  は、一般化された Green の公式により、

$$C(x) \cdot u(x) = \hat{u}(x) + \int_{\partial B} [G(x; y) \cdot s(y) - S(x; y) \cdot u(y)] ds_y \quad (3)$$

となる。 $C$  は  $x$  の位置によって決まる係数であり、境界  $\partial B$  が滑らかであると仮定すると、 $x \in B$  のとき  $I$  (恒等テンソル)、 $x \in \partial B$  のとき  $I/2$ 、それ以外のとき  $0$  となる。境界値  $u, s$  に適当な近似を導入する。 $u(x) = \sum_m \phi_m(x) u_m$ 、 $s(x) = \sum_m \phi_m(x) s_m$  により式(3)を離散化し、与えられた境界値に対し未知の境界値を決定して、関数  $u$  を近似的に決定する方法が境界要素法である(4)。

$$C(x) \cdot u(x) \simeq \hat{u}(x) + \sum_m \left( \int_{E_m} G(x; y) \phi_m(y) ds_y \cdot s_m - \int_{E_m} S(x; y) \phi_m(y) ds_y \cdot u_m \right) \quad (4)$$

## 3 高速多重極境界要素法

離散化により導かれる線形代数方程式の係数は密行列である。直接にこれを解くと、問題の自由度  $N$  に対して、係数行列の記憶容量は  $O(N^2)$ 、方程式を解くための計算量は  $O(N^2) \sim O(N^3)$  となる。これらの計算を高速多重極法、および繰り返し解法によって大幅に縮小しようとする方法が高速多重極境界要素法である。

キーワード：2次元動弾性問題、高速多重極境界要素法、Galerkin ベクトル  
〒910-8507 福井市文京 3-9-1 福井大学工学部環境設計工学科, Tel. 0776-27-8596

計算を高速化するために、式(3)の右辺の積分を多重極展開を使って評価する。二点  $x, y$  に対して、 $y$  の近くに多重極点  $y_0$  をとり、 $x - y_0$  および  $y - y_0$  の極座標表現を、それぞれ、 $(r, \theta), (\rho, \phi)$  としよう。 $r > \rho$  であるとき、Grafの加法定理により、基本特異解(2)のGalerkinベクトル  $F_G$  は、

$$F_G(x; y_0; y) = \frac{i}{4} \sum_{n=-\infty}^{\infty} \left[ M_n^T H_n^{(1)}(k_T r) e^{in\theta} - M_n^L H_n^{(1)}(k_L r) e^{in\theta} \right] \quad (5)$$

$$M_n^T(y_0; y) = -P \frac{2}{k_T^2} J_n(k_T \rho) e^{-in\phi}, \quad M_n^L(y_0; y) = -P \frac{2}{k_T^2} J_n(k_L \rho) e^{-in\phi} \quad (6)$$

となる。(5)を  $F_G$  の多重極展開という。ここに現れる  $M_n^L, M_n^T$  は多重極展開の係数である。

基本特異解(2)におけるGalerkinベクトルについて、本解析では  $F_G$  の場合は(5), (6)を用いてそのまま評価しているが、 $F_S$  については極座標上  $(\rho, \phi)$  で  $f$  を微分し、座標変換を行って直交座標上での値を導いている。また同様に、(1)から変位  $u$  を評価するときにはGalerkinベクトルの二階導関数が必要となるが、 $(\rho, \phi)$  上で共変微分したものを座標変換している。さらに、Grafの加法定理を(5)に適用すれば、多重極点の移動による係数の変換関係は変換後の新しい係数を  $\tilde{M}_n$  として次のようになる。

$$\tilde{M}_n = \sum_{m=-\infty}^{\infty} M_m J_{n-m}(k\rho) e^{-i(n-m)\phi} \quad (7)$$

Galerkinベクトル  $F_G(x; y)$  を多重極点から十分に離れた点  $x_0$  のまわりの局所展開として表すことにする。局所展開点  $x_0$  から見た多重極点  $y_0$  の位置を  $(\rho, \phi)$  として、多重極展開(5)にGrafの加法定理を再度適用し、 $J_n(k_L r) e^{-in\theta}$ ,  $J_n(k_T r) e^{-in\theta}$  について整理すると、多重極展開係数  $M_n$  から局所展開係数  $L_n$  への変換関係

$$F_G = \sum_{n=-\infty}^{\infty} \left[ L_n^T J_n(k_T r) e^{-in\theta} - L_n^L J_n(k_L r) e^{-in\theta} \right] \quad (8)$$

$$L_n = \frac{i}{4} \sum_{m=-\infty}^{\infty} (-1)^m M_m H_{n+m}^{(1)}(k\rho) e^{i(n+m)\phi}$$

が得られる。局所展開の収束半径内に新しい展開点を設け、新しい展開点から見た古い展開点の位置を  $(\rho, \phi)$  とする。Grafの加法定理を(8)に適用すれば、新しい展開係数  $\tilde{L}_n$  と古い係数  $L_n$  との変換関係は

$$\tilde{L}_n = \sum_{m=-\infty}^{\infty} (-1)^{m-n} L_m J_{m-n}(k\rho) e^{-i(m-n)\phi} \quad (9)$$

となる。以上より、全体の計算が階層構造の上で行なわれ、高速多重極境界要素法を2次元動弾性問題に適用できることとなる。結局、この手法を用い境界値  $u, s$  を  $O(N)$  の程度で高速に計算することが可能となる。

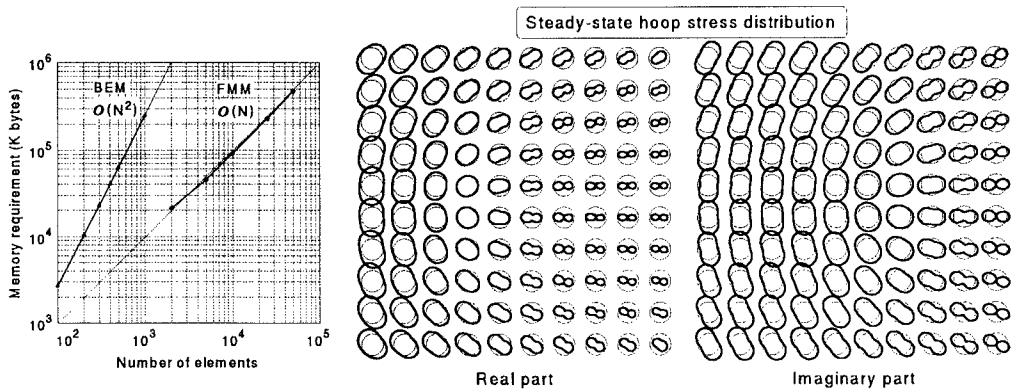


Fig.1 Memory requirement of FMM and Boundary hoop stress distribution of  $10 \times 10$  arrayed circular cavities due to incident longitudinal wave,  $k_L a = 0.0685$ ,  $k_T a = 0.1186$ ,  $N = 6400$ .